

伊藤栄さん

地下鉄サリン事件で負傷。

伊藤栄さんは、日比谷線で被害に遭った。その後、PTSD(心的外傷後ストレス障害)や目の痛みなどに悩まされる。



伊藤栄さん

伊藤栄さん手記

加害者の刑の執行で考えたこと。

1995年(平成7年3月20日)地下鉄サリン事件の被害者となった。ごく普通のサラリーマンの私が、通勤コースの日比谷線中目黒行きの車内で遭遇するはめとなった。

概要は、次のとおり <茅場町駅で前から3両目の後方に乗った。次の八丁堀駅までは僅か51秒である。車内の空気はどこか重苦しく、車両の前方から後方に移動する人も。隣の方は咳を始めた。虫の知らせか、私は八丁堀駅で前から2両目の後方に移動した。

2両目に移動する間に目撃したとんでもない光景は、決して忘れることができない。3両目中央部の床には透明な液体がまかれ、座席には、けいれんしながら座っている人。更に、衣服がはだけ、体液を垂れ出しながらけいれんしている男性がポールにもたれ掛かっていた。

「何だ！これは！」

次の築地駅で、病人がいるという車内アナウンスの後、乗客が具合の悪い人をホームに運び出す。駅員が「担架だ！」と叫び、担架が用意されたが、運び出した乗客も次々に倒れた。

駅員が「緊急避難！」と叫び、乗客は、一斉に改札から地上に逃げた。地上出口は、築地本願寺の目の前で、そこにも立ったま

まけいれんしている人がいて、それはまさに異様な光景だった。

私には、何が起きているか全く分からなかった。地上に上がったところで、1両目に乗っていた会社の上司と偶然合流することができ、タクシーで会社に向かった。車内でも、息苦しく感じて窓を開けた。あちこちから消防車や救急車のサイレンが聞こえていた。会社に到着しても、爆弾騒ぎがあったとか、依然として情報は錯そうしていた。

「パニック映画でもあるまいし！」

目の痛みと視界は暗く鼻水も止まらない。同僚たちの手配により東京慈恵会医科大学附属病院に向かったが、病院は、野戦病院のような有様だった。私は、受診の順番を待つ長い列に並んで診察を待った。医師からは、化学薬品によるものだろうと説明があったものの、治療らしい治療を受けることはなかった。その後、半年間ほど通院した。目の症状は今でも残っている。半年間は、地下鉄に乗ることが怖くなるといったPTSD(心的外傷後ストレス障害)に悩まされた。現在は克服できたと思うが、フラッシュバックなど不安な日々は続いている。> 以上である。

本年、加害者の刑が執行され、本事件のひと区切りがついたとの報道もあるが、それは彼らの問題であって「地下鉄サリン事件被害者」は、何も変わっていなくてむしろ身体的な不安、経済的な不安、サポート(国と行政)の不安と後継団体が今も存続し活動をする不安と「区切り報道」による取り残され感、私だけではないはずだ。事件は、当時の社会情勢に起因する背景を口にする人々もいるが、とんでもない。被害者、遺族、被害者家族は、それでも生きて行かなくてはならない。

絶対に風化させてはならない。私は、これからも機会あるごとに訴えて行くつもりである。

(平成30年12月21日記)

[手記『事件から23年』に際して\(平成29年\)へ](#)